

# 宜保チマシー

— 沖縄・豊見城の世間話いくつか —

中村 史

豊見城<sup>とみぐすく</sup>市は、沖縄本島南部、那覇市のすぐ南、そして最南端の糸満<sup>いとまん</sup>市の北側に位置し、都市と農村の性格をあわせもつ町である。最近とみに大都市の様相を示してきた那覇市に隣あい、豊見城市も急速に変わりゆく観がある。長いあいだほとんど日本最大の村として存続していたが、二〇〇二年四月、ようやく市となったのである。歴史をふりかえれば、まず、群雄割拠の三山時代<sup>さんさんえい</sup>（十四世紀初）、この地は南山<sup>なんざん</sup>に属してその出城である豊見城<sup>とみぐすく</sup>城を擁していた。三山統一（二四二九年）後、第一尚氏時代を通じ、また、第二尚氏の王府時代には豊見城間切<sup>とみぐすくまきり</sup>として、つねに、那覇・首里の中央と南部をむすぶ重要な地でもあった。あの沖縄戦に際し、激戦地となつて多くの犠牲者を出したことも付けくわえておかないわけにはゆかない。いまをさかのぼる十数年の一九八九年（平成元）と一九九〇年（平成二）の夏、二度にわたる民間説話の集団調査<sup>2</sup>が行われ、二十世紀も十年を残すのみのこの時期としてはまずまずの成果を挙げている。その後著者はこの仕事を受け継ぐこととなり、資料整理、追跡調査、またそれ以外の調査をも行つて、いくつかの調査報告と論文を公刊している<sup>3</sup>。

今回、いまだやり残している仕事の一部をまとめておくことにしたいが、本稿は、前述の集団調査による豊見城の民間説話資料のうち、「世間話<sup>5</sup>」としての性格をもつ三話についての考察である。世間話とは、語り手が最近實際

にあつたこととして語り、聞き手もまた半ば以上事実譚と信じて受け止める、といったようなタイプの民間説話である。狐にばかされた話、神仏に救われた話、幽霊を見た話などの、非日常的ないし異常な体験を語るもの、また変人・奇人、大金持ち、強力者ゴウリキシヤといった人物についてのエピソードなどがそれに当たる。南島・沖縄ではこの世間話が、事実を伝えると信じられるほかの民間説話、「伝説」や「史譚」と接しつゝ特異な発達をしているように思われる。

### 宜保チマシー

まず、豊見城村（現在は市であるが、以下調査当時の名称による）宜保ぎほの金城宏吉きんじやうさん（明治四十年生）の語つてくださった豪快な強力者譚ゴウリキシヤを挙げておきたい。

宜保ぎほの部落の民話としては、題目として「宜保チマシー」という（話があります）。「宜保ぎほ」は、「宜保ぎほ」というのですね、「宜保ぎほ」を「じふ」と言うんですよ、方言では、「チマシー」、「チマシー」という人がおつたという話なんです。その人のことについてそいじゃあ、ちよつとお話したいと思ひます。この人は、いつの時代かよくわかりませんが、宜保ぎほに生まれて宜保ぎほの人として、農業を営営んでおつた人のようです。ところが、格はずれの力持ちで、すばらしい、人だつたという、ことなんです。昔のことばで言うと、その力持ちのことを、「ブシ」と、いうんですけれども、そういう、ことで有名だつたそうです。で、どのくらいの力があつたかということにまつわる話が、よくあるんですが、まずまっさきに農業しておつて、耕す鋤う、その鋤うの大ききでよく、表現しておるようですが。その鋤うは、普通の、戸板、戸板の幅ぐらいの、まあ言えば一メートル幅ぐらいの、鋤うだつたということ。それで非常に、力持ちだつたというような表現しております。で、その人が、仕事を終えてうちへ帰るときには、鋤うは持つては帰らない。どうするかというと、その畑のなかにい

ちおう力いっぱい打ちこんでおくと、だれもそれを盗んでいく人もいなくて、いつまでもそのままあつたという、そのくらいの、ま、力の表現です。

で、それから、その人がですね、ほかの話に飛びますけれども、有名になったもんだから、あちらこちらから、この人はどれぐらい力があるだろうかと言って、いわゆる昔の沖繩での、「カキダメシ」——「カキダメシ」というのは、力試しですよ——その「カキダメシ」ということで、これと力争いしてみようというところで、訪ねて来た人が、たまたまあつたそうです。で、ある日のことですね、まあ、那覇からという話が多いですけど、れどもが、沖繩に、沖繩じゃない、この、宜保ぎほに、訪ねて来まして、「ここに、有名な力持ちがおるそうだが、それと力試しをしたいと、カキダメシをしたいと、いうわけで来たんだ」と、言ったら、そこにおつた、うちの、主ぬし(すなわちチマシー)がですね、「その人ならば、おりますけれども、いまはよそ出ていっていない」と。「いないが、まあ、どんなふうですか」と言っている話をしてから、「まあまあ、あわてないで、煙草でも一服、つけてからしなさい」というわけで、大きな——煙草の、火を盛る、いわゆる石ですが、それ煙草盆と言うんですが——煙草盆の石で作つた、木でなくて石で作つた煙草盆を、取つて、この人が、「さあどうぞ」と言つてまえにつき出したら、力試しに来た人は、それを取つて、置くことができない。持てなかつたと。持てなくて落としたということ。それからこの人はびっくりして、おつたそうですが、「実は、本人がいないので、わたし弟ですが、まあどうぞ」と(主ぬし、つまりチマシーが)言つてやつたのが、こういう結果になつて。その人はびっくりして、「弟がこんなに強ければ、兄さんはどんなに強いかしら」ということで、気がひけて、そこに、いろいろ、話をしただけで、まあ、引きあげることになつたそうです。

そのまえにですね、(那覇の力持ちが)来たときに、馬を乗つて来たもんだから、その馬をですね、馬のその手綱を取つて——ま、話は、手綱ということもあるし、また、鐙を下げる革ということもあるんですが——そ

れを、屋根の、軒の、大きい桁があるんですが、その大桁をつき上げて、そこにその、手綱のほそ（＝臍？）をはさんで、下ろしておいて、そして、話をしたんだそうです。それで、帰る段になって、その馬（の手綱？）を、はずして持つて行こうとするけれども、これが取れない。取れないで、侘びして、「取ってくれ」と言うて、取つて、それで、その馬を、乗つて、また、帰つたんだそうです。それがひとつの、宜保チマシーの力の、試しに——そのほかにもあるんでしょうけれども——なつたわけだそうです。

で、それを終えて帰るときにですね、帰るときに、この、部落のうしろに上がつて、那覇道があるんですよ。那覇に行きかえりする道があるんです。もとあつたんです、小さいときに。その那覇道を、引きあげて帰る途中に、上のほうに、われわれが子どものときによく、「アンマームケイドウクル」——「アンマー」というのは「お母さん」ですね。「ムケイドウクル」（は）、「迎えるところ」。「お母さん迎えるところ」——「アンマームケイドウクル」という、ところに、すこし広場みたいなところがありましてね。そこに、さしかかつたときに、そこに、市場から帰る、那覇から帰るお母さんだちが、おつたので、そこで、立ち話をするあいだに、「どこ行つたか」と言うたら、「力試しに行つてやつつけて来た」と、「宜保チマシー、ほくがさんざんにやつつけて来た」と、いうことを、言うもんですから、その部落の人々は、「信じられない」と、言うから。（お母さんたちが）びつくりして走つて来て、うちに行くまえにそこに寄つてみたら、寄つてみたら、宜保チマシーはうちに居つてなんのこともないと。それで、（お母さんたちが）「こんな言うとりましたよ」と言うもんだから、怒つて、それから、この人（＝チマシー）が追つかけて行つて、そのアンマームケイドウクルまで行つてですね。行つてみたら、その人（＝那覇の力持ち）が、まだそこに、うろろうしておつたから、「この野郎」と言つて、今度は、その人に手をかけるまえにですね、その馬がおつたから、馬の後脚を、取つてから、ポキッと、ちぎつて、捨てたと。そこで帰るわけにもいかないということで、逃げたという、まあ、ひとつ話があるんですよ。

愉快、痛快なブシの話である。宜保ぎほの人・チマシーは桁はずれの力持ちとして知られていた。あるとき、そのうわさを聞いた那覇の人がカキダメシ（力試し）にやってきた。自分はチマシーの弟だ。そう言つてチマシーが石の煙草盆をわたしたところ、あまりの重さにそれをとり落としたりした那覇の人は、「兄」の強力を想像しておそれをなし、帰つていった。そして、その帰途にアンマームケイドウクルで、市場帰りの女たちに宜保ぎほチマシーをやつつけたと豪語した。これを聞いたチマシーは怒つて追いつき、那覇の人の馬の脚を折つて捨てた——金城さんはそんなふう

に語つてくださった。

ブシとは武芸者、とりわけ空手使い、または強力者、力持ちのこと。沖繩の伝承世界においてこのふたつのタイプの人々はしばしば区別しがつたいが、ここでは強力者の傾向の人々を取りあげる。沖繩の人々はこうしたブシの話を大変好む。一冊の昔話集を開けばかならず見つかるというぐあい、その人物名や話柄はともここに挙げつくせない。たとえば、那覇市小祿おろくの赤嶺勢理客あかみねじりやく、勝連カタカシラかつれん、また、まとまった数で採録されているところでは、西原町の桃原クツティーワンにしはらとうもろばる、下門ワンジャーしもじよ、運玉又吉小らうんたままたよしくわら、久米島・仲里村の山城大柵原なみさとそんやましくらいたなばる、ティーラントウルーブシ13など、その名も愉快な多くのブシたちの名前が挙がる。また、豊見城市のとなり漁師町の糸満市でも、著者自身お年寄りたちが嬉々として語る糸満マギー、文徳マサーぶんとくなどといった圧倒的な力持ちたちの話を聞かされた。<sup>14</sup> これら数多いブシたちは何百年か以前にその土地に生きていたという場合もあれば、語り手自らがわかいころに見たという場合もあり、いずれにせよなんらかの实在性・事実性をもたされつつ親しい気持ちよせて語られるのである。

さて、ここに紹介した「宜保ぎほチマシー」とおなじ類型の力くらべ譚は、日本本土でも大変人気のある話である。関敬吾の『日本昔話大成』では鹿児島県喜界島から青森県下北半島まで日本中の事例が数多く集成されている。<sup>15</sup> 日本15の「仁王」、唐の「賀王」といった強力者の誇張された怪力ぶりが聞き手のおおらかな笑いをさそう「法螺話」<sup>15</sup>「大

「話」である。ここにおいて、沖縄の力くらべ譚はすこしばかり趣がちがう。沖縄の伝承説話全般に通ずる性格として、なにごととも事実には傾斜して語られるということがある。本土では「本格昔話」あるいは「笑話」の虚構世界でできごととして語られるものが、沖縄ではしばしば事実あったこと、語り手やその周辺の人々の家に伝わる話、それらの人々の体験・見聞したこととして語られる。沖縄では総じて昔話は伝説化、世間話化するのである。また、本土で昔話の話し型であるものが、沖縄では「伝説」「史譚」「世間話」を形づくるのである。さて、沖縄の本島での話し型の力くらべ譚の主人公になるのは金武町のジープのブシ、読谷村の瀬利ぬブサー御主前、ヒージャ、与那城村の平安座ハツタラー、西原町のカンジャメークシー、那覇市小禄の赤嶺勢理客、与那原町の内原子、佐敷町の佐敷小按司、糸満市の保栄茂タルチーといった強力の人々である。これらの人物の実在性については、それぞれなにがしかの証拠があり、各話はその信憑性を保障しつつ語られていることが多い。佐敷小按司はいうまでもなく第一尚氏王朝をひらいた尚巴志王のことである。また、内原子はその尚巴志王にほろぼされた大里按司の家来であったということ、これらふたりの英雄的人物の話は「世間話」ではなく、もうすこし古い時代の琉球・沖縄史上の有名人物の伝承、「史譚」としてとらえられるべきものである、とりあえず考察の対象からははずそう。のこる人物たちのうち、ヒージャについては、いまはその子孫はいないが墓と宅地は残っているという。平安座ハツタラーの場合はいまも山城フクヌヤ、チバナヤという子孫があつて、その人々の手によつて祭られ、また、系図も墓も存在するというのである。カンジャメークシーは西原町の我謝をはじめた人で、以前その屋敷のあつたところが現在御願所になっているとのことであり、赤嶺勢理客は語り手の祖先の話として語られる。保栄茂タルチーの場合、その末裔が糸満市の喜屋武や名城にいて、旧七月七夕と正月に拝所をまわり佐敷の拝所に出かける、と自身ピンタルチーの子孫だという語り手がおつしやる。というわけで、彼らは多く、家の祖先、村の小英雄として伝えられる強力者たちである。卑近さと共存しつつ、これらの話にそなわる事実性そして信憑性は、ときとして神話の神聖性

にまで通ずるものである。

宜保<sup>じよ</sup>チマシーもまた琉球王府時代末から明治のはじめごろに実在した人物といわれている。たとえば、金城宏吉さんは宜保<sup>じよ</sup>チマシーの後日譚をつぎのように語られた。<sup>26</sup>

チマシーはその後垣花<sup>かまのはな</sup>(現那覇市山下町および住吉町)へ逃げ沖仲仕になったが、その力ゆえに憎まれ射殺されて垣花に葬られた。何十年かのちの明治四十年に彼の墓を宜保に移したところ、翌年子供が十三人生れ、以来チマシーは神と崇められた。彼の墓といわれるものをいまから十何年かまえに開けたとき、小さい甕が十三見つかったので一門の墓であったと見られる。チマシーは大男だったので頭骨が大きすぎて甕に入らず、そのうえに載せてあつた<sup>27</sup>という。(要約)

また、チマシーが飲んだ井泉(カー)の水を八月十二日に集落で拝んでいたということである。近つ世の人ながら神として崇拜されるといふ、ヤマトンチュ<sup>28</sup>からすれば実に奇異な現象である。すでに述べたように、沖繩において世間話は伝説、史譚と接している。のみならずまた、世間話は神話に傾くことさえある。そうして、神話はいまだ遠い過去の時代のものとなつておらず、現代においてもなお発生しつづけているのだ。

親愛と畏敬の念をもちつつ事実譚として伝えられていた、近世の村の小英雄、強力<sup>じよ</sup>の宜保チマシーのエピソードに「仁王と賀王」の話型がとりこまれたものが、「宜保チマシー・力くらべ」である。「法螺話」「大話」の話型の性格上、そこでは、チマシーの像は昔話(笑話)の主人公に近いものになっている。ところで、この力くらべ譚のなかで、チマシーは「わたしはチマシーの弟です」と言つて、カキダメシにやつてきた那覇の人をだます。巨大な石の煙草盆を持ち上げる「弟」を見て、「弟がこんなに強ければ、兄さんはどんなに強いかしら」と、那覇の人はおそれなして逃げ帰る。ほかの多くの類型話と異なるのはこの点である。多くの場合、挑戦者は強力者の妹、妻などの女性親族の強力ぶりを見て、あるいは嘘いつわりのない主<sup>あそび</sup>その人の強力ぶりを見て逃げ出すのである。ここにお

いて、宜保チマシーはただの強力の持主ではない。すぐれた知恵のはたらきによって危難をのりきる巧知者でもあるのだ。現代人はチマシーの機転を悪知恵と批判してはならない。どんな知恵も、昔話の世界では局面を打開し、幸福をもたらすたくみな策なのだ。

### ジョン万次郎

「ジョン万次郎」、かの中浜万次郎がアメリカから鎖国中の日本に帰る手段として、琉球国に上陸したことはよく知られているだろう。この有名人物についての伝えがまた、豊見城において説話的伝承となっている。まずは、豊見城村翁長の高安盛登さん（明治四二年生）が語ってください<sup>31</sup>たものを示そう。

（万次郎は）高安の、徳門、屋号徳門というところに、寝泊りして、相当長くいたんでないですか。これは子孫が、翁長の徳門ということをわかって、そして、お互いに、話しあいしよう言うて、（土佐清水に）呼ばれたらしいです。はい、亀栄さん、高安亀栄。その人が行って、ちゃんと記録の本が持っているんですよ、この人が。

そして、（万次郎も）あとは慣れてですね。門のほうも、障害作って、門の入り口を封してですね、封して。出られんように。それから、上から飛び越えていきよつたらしいんですよ、その万次郎さんは。ブシでもあつたらしいです。門があるでしょ、どこのうちでも。この、ここに、竹で作った、障害、障害ですね、障害物。竹で編んだものがあつたでしょ、昔は。今はないんですけども。茅葺の場合ですね、うちの壁をするときに、これチヌブと言いますがね、チヌブ。それで、高さが一間ぐらいあつたんですがね、あのころ。（万次郎は）これが上から飛び越えて行きよつたらしいですよ。そして、男女・青年と、いっしょに遊んでおったという話もあります、この翁長部落の。翁長部落は、昔はモーアシビーですね、これがさかんであつたんですからね。自



分だちまではさかんであったんですよ、モーアシビーはね。それいっしょに遊んで、いたという話も聞かされています。

(万次郎は)たしかにブシだったらしいですよ。一間ある、この障害物から飛び越えて遊びに出よつたらしいですよ。「これからは、大丈夫出らん」と思って、この部落、役員連中が封したところ、飛びこえて行きよつたらしいですよ。だから、普通の人間なら跳びこえんらしいですよ。これ普通の人ではなかつたなあと、話もあつたんですがね。

ジョン万次郎は翁長の屋号徳門という家に長く滞在していた。門の入り口は封じてあつたので、高さが一間(一・八メートル)くらいあるチヌブ(山原竹で編んだ垣)を飛び越えてモーアシビーに出かけていった。万次郎は普通の人ではなかつた。たしかにブシだったらしい。なお、この語り手はおなじ調査の機会に、ご自身の祖先に当たるといふ、ある女性の悲劇的な伝承、「瓦屋節の由来」を語ってくださっている。万次郎がいた高安家とはおなじ門中の関係だといふ。

万次郎(文政十年(明治三十一年、一八二七—一八九八)は幕末のころ土佐国中ノ浜(現高知県土佐清水市)に漁師の子として生れた。世が世なら普通の漁師として生涯を全うしたであろうが、動乱の時代に生まれあい、思いがけず波乱の生涯を送ることになった人である。天保十二年(一八四一)嵐のため仲間とともに漂流し、アメリカの捕鯨船ジョン・ハウランド号に救われたことが大きい転機となった。ホイットフィールド船長に気に入られた万次郎はアメリカに伴われ、かの国で教育を受けて英語、航海術など多くのものを身につけたのである。この異国の生活を楽しんでいたらしい万次郎も、しかし望郷の念は断ちがたかつた。そこで、帰国の決意をかため、嘉永四年(二八五)一月、仲間をともなつて琉球国摩文仁間切小渡(現糸満市大度)の海岸に上陸した。そして、官命によつて那覇へ送られるが、途中から豊見城間切翁長村にひき返すこととなり、その高安家に預け置かれて数箇月を送つ

たのである。同年七月薩摩へ護送され、十月には帰郷したが、その後土佐藩や幕府に仕えて英語を教え、また航海術を伝えるなどして活躍したことはよく知られている。

この数奇な体験について万次郎自身はまとまったことを書き残していないが、土佐藩の命によって画家・河田小龍がその聞き書きを記録した『漂異紀略』など、彼の「漂流記」は数多い。その『漂異紀略』<sup>35</sup>によって、高安家滯在前後の彼の動静を見てみよう。

……一八五〇年（嘉永三）八月、カリフォルニアを出発した万次郎はハワイのオアフ島にたち寄った。そこでかつてともに漂流した伝蔵・五右衛門親子らと再会し、やがて便船を得て伝蔵親子とともにオアフ島を出発した。そして、琉球・糸満沖でボートに移り、ついに浜に上陸したのが嘉永四年一月二日である。さて、一夜明けての三日、釣竿を持った三、四人がやって来たが、声をかけようと伝蔵が近よると逃げてしまった。ひとりひき返してきてなにごとかを言うが通じない。それでも気をとりにおして人家をさがすうちに、何人もやってきたので、伝蔵が「ここはなんというところだ」と尋ねたところ、日本語で「琉球国摩文仁間切」と返事があり、「人家はあるか」、また、「あなた方はどこの国の人か」云々と会話を交わした。わけを知った人々は「よいようにしよう」と三人をいたわり、茶を飲もうとすればあらそって水、薩摩いもなどをくれた。やがて、老少の人々がめずらしいものと見守るなか、官憲の指示ということで那覇に送られることになった。一行は雨あがりのぬかるみ道を苦しみ進んだ。三更におよぶころ（夜中の十二時ごろ）、那覇へ四丁ばかり（四百メートルあまり）というところで、那覇より飛脚があつて翁長村までひき返せとの命を伝えたので、三人とも駕籠にのつて翁長村にもどり農家らしき家に入った。その主人は「ペイチン」と呼ばれていた。つづいてべつの農家にもなわれ、漂流の一件について詮議があり、そのちペイチンの家へ帰った。翌四日も取り調べ。以後ペイチンの家に万次郎たちが住み、ペイチンはとなりに茅家を作つて、妻および「シグワア」「ウシグワア」などという八人の女兒をひき連れ移った。その家で三人は薩摩・琉球の官

吏たちに護衛され、琉球の料理人の用意する食事をとった。国王（尚泰）からのさまざまな下賜物もあった。七月十一日になって、薩摩の官吏七名が来て三人を那覇へ送ることになったとき、親しくなった村人は涙ながらにわかれを惜しんだ。黄昏どきに那覇港に停泊する薩摩の官船に乗り、十八日那覇を出発して薩摩にむかった。……

「ペーチン」（親雲上）は琉球王府が授ける称号であり、この場合、百姓（平民）も功績によって与えられる「筑登之親雲上」のことなのであろう。ともかくこの呼び名によって、高安家が翁長の中心となる家であったらしいと察せられる。この高安ペーチンの子孫の人たち、また翁長集落の人々のあいだには万次郎についてのさまざまな伝承が残されている。戦前のことであるが、琉球史家の真境名安興は、高安公造という七十一歳の老人から、この老人が祖父（すなわちペーチン）から聞いていたという万次郎の話を書く機会があった。それによれば、

この人の祖父は村の役人で、万次郎が駅次で（那覇へ？）送られた日には当番であった。万次郎は六月の綱引きに参加した。屋敷のまわりは一間のチヌブで囲われていて出られなかったが、のちには自由になった。万次郎は「徳」の名で呼ばれていた。（要約）

などという。また、べつの人によると、<sup>37</sup>

徳門・高安家には万次郎が使っていたステッキも残っていた。九十歳くらいになる徳門の老婆の話では——村民の武芸達者な者が（ペーチンの家の）門番をした。（万次郎は）わかれるとき、郷里に無事着くことができた。再会の機会もあるだろうと言っていた。はじめはことばも通じなかったが、のちには「諧謔もやるやうにま でなつた」。（要約）

などということであった。万次郎と徳門の人々、村人とのあいだにさまざまな交流のあったことが親しみをこめて語り伝えられている。聞く者も大変心楽しい。

さて、高安盛登さんの語りで、万次郎は徳門の家を出てモーアシビーに出かけて行ったという。モーアシビーと

は戦前くらいまで沖繩にのこっていた男女交際の風習であつて、わかい未婚の男女が夜に野や山に出、ともに歌の掛けあいをし、また三味線をひきつつ歌いおどるというものであつた。ここから恋愛や結婚も生れたのだという。日本古代の「歌垣」<sup>うたがき</sup>もまたそのようなものであつたであろうか。沖繩の町・村をまわつてお年寄りにお話をうかがううち、あるときふと「おわかいころに一番楽しかつたことはなんですか」と問うた著者に、農業一徹に生きてこられたその場のお年寄りたちが異口同音に「それはモーアシビーだ」とおっしゃつたとき、一種の感慨にうたれたことをいまでも記憶している。そんな楽しい青年男女の集まりに万次郎は出かけていったのだ。明朗で積極的な性格だつたと推測される万次郎はどこへ行つても好意的にむかえられ、良好な人間関係を築いたのである。しかし、一間のチヌブの竹垣を飛びこえてとは、まるで昔話の強力者の話を聞く思いがする。「万次郎は）たしかにブシだつたらしいですよ」、「これ普通の人ではなかつたなあという話」と高安盛登さんはおっしゃる。親愛の情をもつて語られ、伝承を重ねるうちに万次郎の像もまた、宜保<sup>ぎほ</sup>の強力者・チマシーのような超人的ブシになつてゆくのだろうか。人垣やチヌブを飛びこえて「てーげーぬ<sup>ちぬ</sup>人あらん」（普通の人ではない）と驚嘆される——というのは、ブシの超人ぶりが語られるときのひとつのパターン<sup>38</sup>なのだ。

著者がようやくはじめて万次郎の滞在した徳門・高安家を訪問したのは、一九九八年（平成十）八月のことであつた。豊見城村立図書館の宜保<sup>ぎほ</sup>喜久館長（当時）のご案内でかなえられたことであつた。当主の高安亀平<sup>きへい</sup>さん（昭和四年生）は五代目、真境名安興氏に万次郎の話をした公造さんはこの家の三代目で、亀平さんの祖父に当たられる（初代のペーチン<sup>ぺーちん</sup>は名前がわからないとのことであつた）。亀平さんのお話では、万次郎がモーアシビーや旧六月十五日の綱引きに参加したというのはほんとうだ、とのことである。綱引きでは、万次郎が加わつたので東が勝つたとペーチン<sup>ぺーちん</sup>はご機嫌だつた、とおっしゃる。また、この家の石のヒンブン（門と屋敷のあいだに置く目かくしのための屏風）は万次郎当時のもので、万次郎が運動のために毎夜七回ずつこれを跳びこえていた——という話も聞いた。



徳門・高安家。正面に見えるのは万次郎が毎夜跳びこえていたというヒンブン。モーアシビーの野原を背にして撮影したもの（2001年9月、平井孝典撮影）。

### 肝試し・返り討ち

この話は、豊見城村よね与根ねの瀬長新吉せながさん（大正八年生）が語られたものである。大勢のお年寄りが集まっておられる集団調査の場で、まず、お仲間の平安山良吉へんざんさん（大正十三年生）が、この話について、

あんたできるか、できないかというのを、賭け事やって。本土でもあるかどうか知りませんが、沖縄でよくあつたらしいですよ、沖縄ではね。大昔ではなくて、われわれが幼いころの話ではないかなあ。だと思っ  
てすがね。

と口火を切られたあと、やや断片的な語りではあつたが、瀬長さんはこんなふうが続けられたのであつた。

これも、脅かそうと先まわりして、墓の上かみにね、白い衣装つけて、幽霊ゆうれいみたいに立った人が、「この人がやるなあ」と思つて先まわりして脅かそうと思つたが、逆にやられたという話。これ伝え話、あるんだけども。

た。とかく万次郎の話はブシの話に傾斜してゆくようである（なお、例のステツキは亀平さんの子どものころたしかにあつたが、戦争で焼けたということ、なんとも残念である）。

最後に門の外までわたしたちを見送りに出られた亀平さんが、門の正面数メートルのところにある野原を指さしておっしゃつた。「そこは昔のモーアシビーの場所ですよ」。なるほどこれは、にぎやかな歌声、笑い声わらひこゑがそのまま万次郎の耳に響いてきたと思われれる至近の距離である。青年・万次郎が静座にたえられずチヌブを飛びこえていったというのも、まったく無理からぬことであつた。

これを聞いてみると、あたかも、おふたりが幼いころ実際に起こった出来事をそのうわさのままに伝えておられるかのようであったのだが……そうではなかった。

民間説話の本質を究明するひとつの有効な方法は、その類話を探しもとめそれらと比較・検討することである。そうした作業を進めるなかで各話の差異と普遍性が見えはじめ、その説話の本質が浮かび上がってくるがしばしばある。そこで、著者は豊見城の「肝試し・返り討ち」と話型をおなじくして語られている話はないものかと探してみた。すると、沖縄本島・北部の宜野座村でこれと酷似する話が採録されていることを知った（梗概のみの報告）。

ある男二人が、夜中墓に行けるか行けないかかけをする。行けると言った男が出かけると、もう一人は先回りして墓に隠れ、男を脅かす。男は驚いて脅かした男を斬りつけてしまう。

というものである。ここで、豊見城村の「肝試し・返り討ち」が事実そのままの報告でなく、ほかの場所に類型の話をもつ伝承説話であろうという見当がついてくる。宜野座の事例につづいて豊見城のものに近い例として、つぎのような那覇市での採集例がある。

人々が肝試しをすることになり、臆病者が妻の教えに従って蓑笠を着け、牛を二頭連れて墓場に行った。翌日様子を見に行ってみると、白い着物を着た三人の仲間が死んでいた。（要約）

この三人は臆病者を脅かそうと白い着物を身につけて待ち構えていたが、臆病者の異様な姿を見てショック死した——ということなのであろうか。名護市、読谷村、西原町、東風平村で類話が見つかっている。また、那覇市のべつの採集例は、つぎのとおりである。

モーアシビーの帰りに、昨日亡くなった人を担いで来られるかどうか賭けをすることになった。できないという方に賭けた人が死人のかわりに棺に入り、できるといふ方に賭けた人に担がれた。ところが、担がれた人

が担いだ人に噛みついて投げ出されたので、翌日は担がれた人(できない方に賭けた人)の葬式になってしまった。また、担いだ人(できる方に賭けた人)もやがて病気になり死んでしまった。(要約)

この話の語り手は、  
今申し上げますのは、昔の先輩方から聞かされた話であります。賭はしてはいけないと言う言葉があるので  
すよ。

と折り目正しく語りはじめ、

このような賭け事というのは、勝っても負けてもいいことはないから、やってはいけないという話。これは大昔の話だがいまの青年達にも聞かさなければならぬ、守ってくれよと。

と重々しく語りおさめている(ともに方言の語りにつけられた標準語訳)。青年の血気にはやる性をいさめた教訓的な話になっているのである。この教訓性は実はさきほどの那覇の例(「蓑笠に牛」)にもうかがわれる。このように、語り手たちはしばしばその話が事実であったことだと言い添え、また、ひとつの教訓をもって締めくくるのである。

以上の話を一括して、「肝試し・返り討ち」型と名づけるとするならば、それとやらんでよく聞かれる、もうひとつのタイプものを挙げてみよう。たとえば、読谷村の伊良皆いらみなで採録された例は、

ある人々が肝試しをすることになり、恐ろしい場所(墓)に証掘の杭を打つてくることに決めた。そこに行つた人があわてて自分の着物の裾を打ちつけてしまい、立ち上がったときに着物が引っぱられて恐怖のあまり気が絶した。(要約)

という、ちょっとおかしいような話である。これを「肝試し・杭打ち」型とも名づけるとすると、その類話は、  
恩納村おんなそん、名護市46、また、読谷村のほかの集落47、金武町きんぶ、石川市いしかわ、那覇市50、東風平村51などで報告されている。那覇の

例は名護で起った「実話」となっており、東風平の例は南風原はなまげの津嘉山つかやまの「ユージャー墓ぼか」で若いころにあった話だという。また、読谷村渡慶次とけしの例は「本当は賭けをするものではないという話」と締めくくられ、また、東風平のべつの例は、

賭けはするものではないという話があっただけだね。……だからね、人が賭けをするときは、「どこ、どこに行けるよ」と強情になって賭けをしてはいけない。

という語り出し、語りおさめによってまとめられている(方言の語りにつけられた標準語訳)。こういった事実性の強調と意味づけによって、たわいない笑い話と化しそうな話が、それなりに信憑性と教訓性をもつ話に仕立てられているわけである。

なお、この「肝試し・杭打ち」とおなじ話型の話は、関敬吾『日本昔話大成』によって、日本本土の山形県、宮城県、長野県、岡山県、島根県などの事例が集成されている。<sup>52</sup> また、ヨーロッパの昔話を分類したアンティ・アルネ、ステイス・トンプソンによる話型のうち、AT一八五四「憶病な仕立屋の話」がこれに相当すると言われているから、<sup>53</sup> それなりに世界的な広がりをもつて伝承されている話かもしれないと予測されるのである。ともあれ、豊見城の「肝試し・返り討ち」は、沖縄でも本土でも伝承されている「肝試し・杭打ち」の話型とかかわって、あるいはそこから派生して語られている肝試し譚のヴァリエーションのひとつなのである。これらの話の群は、肝試しといういかにも南国の夜にありそうな場を契機とするもので、それだけに南島の人々に好んで話された話だと思われる。ヴァリエーションの豊富さ、類話の多さもそのことをうかがわせる。

ところで、本土の肝試し譚(杭打ち型)は笑い話(愚人譚)として語られていることが多いようだ。とき・ところ・ひとを定めずに虚構の世界のできごととして語られ、臆病者の愚かな行為を笑わせ、かつ、ひと一般の行為の軽率・粗雑さをいましめるものなのである。それに対して、沖縄の肝試し譚はおなじく虚構の事件を語りながら



も、それが事実には傾斜する性格をもっている。それだけに、とりわけ「返り討ち」型など人の死にまで発展する話は笑ってすませるにはすこしばかり深刻にすぎ、笑い話よりいつそう教訓になじむ。豊見城の「肝試し・返り討ち」も、つまらない賭けで命をおろそかにするなと、若者の軽率な行動をいさめる教訓話だったものと理解すればよいのだろう。

時代は二十一世紀に入り、口承文芸、民間説話はいよいよ終焉のときをむかえている。そのなかで命強く容易にほろびないのが怪異譚の類である。幽霊や妖怪などに遭遇した話、なにかの非日常的・異常な体験をした話などがそうである。八十年代ごろに一世を風靡した「口裂け女」、またいまも創造されつづける「学校の怪談」<sup>54</sup>などが思いおこされる。南島・沖縄はとりわけ怪異現象を信ずる精神風土をもつ。肝試し譚はそうした怪異譚の周辺にながく生きつづける可能性を秘めているのであろう。

以上、「宜保チマシー——沖縄・豊見城の世間話いくつか——」と題する本稿は、豊見城市の民間説話資料のうち、「世間話」としての性格をもつ三話についての考察である。「沖縄・豊見城の昔話いくつか」、「沖縄・豊見城の伝説いくつか」という副題をもつ続稿を用意したいと考えている。

### 注

- 1 「間切」は琉球王府時代の行政単位であって、おおよそ現在の市町村に当たる。当時の「村」<sup>ま</sup>は「間切」のなかの各集落であり、現在「字」<sup>あ</sup>名を以て呼ばれるところの家々の単位であった。
- 2 福田晃氏指導の立命館大学・説話文学研究会による。当時大学院生であった著者もこの調査に参加している。

- 3 拙稿「沖繩・豊見城の昔話」(奄美沖繩民間文芸研究 第一八号、一九九五年一月)、「沖繩・豊見城村の『瓦屋節由来』」(『立命館文学』五五二号、一九九八年一月)、「沖繩豊見城村のキシムナー話」(『人文研究』第九五輯、一九九八年三月)、「沖繩・豊見城村の伝説『真玉橋の人柱』」(『人文研究』第九七輯、一九九九年三月)。
- 4 この仕事は、シリーズ「琉球の伝承・文化を歩く」(三弥井書店)の一卷として公刊される予定である。このシリーズは、専門家のみならず、琉球・沖繩、また民俗・民間説話に関心をもつ一般読者をも対象として編まれるものである。
- 5 福田晃氏「総説・民間説話」(同氏編『民間説話——日本の伝承世界——』、社会思想社、一九八九年)。
- 6 福田晃氏「総説・民間説話」(注5参照)、拙稿「伝説と史譚の位相」(『民話の原風景——南島の伝承世界——』、世界思想社、一九九六年)。
- 7 平成二年八月九日(木)、福田晃、月本一武両氏採録(於宜保公民館)。著者翻字。なお、金城さんは、沖繩戦の際には第二高等女学校(白梅部隊)の教員を勤められ、戦後は高等学校の校長をしておられた方である。
- 8 標準語の発音で「ぎぼ」、方言の発音で「じ(ー)ぶ」というのが一般的であるはずだが、金城さんはこのように発音されている。
- 9 沖繩では普通士族身分そのものさしてブシとは言わない。
- 10 空手つかいのブシとしては、ブシ松茂良、本部サール、喜屋武ミ小などが本島全域で知られ伝承されている。みな、王府時代から昭和のころに实在、活躍した人物たちである。
- 11 『那覇の民話資料』第一集(那覇市教育委員会、一九七九年)、同第六集(同、一九八四年)。
- 12 西原町史編纂委員会・遠藤庄治氏編『西原町史』別巻『西原の民話』(西原町役場、一九九一年)。
- 13 遠藤庄治氏編『仲里村市』第四巻『仲里の民話』(仲里村役場、一九九五年)。
- 14 立命館大学説話文学研究会編『沖繩・糸満市の昔話』(糸満市教育委員会、一九九六年)。
- 15 第九巻、「笑話二」「三 巧智譚」、四八〇「仁王と賀王」。
- 16 『金武町の民話と伝説』(金武町教育委員会、一九八九年)。
- 17 『宇座の民話』(読谷村教育委員会、一九八四年)、『渡慶次の民話』(同、一九八五年)。

- 18 遠藤庄治氏監修『よなぐすくの民話』(与那城村教育委員会、一九八九年)。平安座ハツタラーは地域をこえて語られる人の強力者である。勝連町の津堅ハンタ小、具志川市の具志川カーミワイが力くらべにゆく、おなじ話型の類話が、それぞれの挑戦者の地元で採録されている(遠藤庄治氏編『かつれんの民話』上巻〈離島編〉〈勝連町教育委員会、一九九〇年〉、『具志川市史』第三卷〈民話編上・伝説〉〈具志川市教育委員会、一九九七年〉)。
- 19 『西原の民話』。注12参照。
- 20 『那覇の民話資料』第一集。注11参照。
- 21 遠藤庄治氏編『よなばるの民話』(与那原町教育委員会、一九九〇年)。
- 22 立命館大学説話文学研究会編『沖繩・佐敷町の昔話』(佐敷町教育委員会、一九八九年)。
- 23 『沖繩・糸満市の昔話』。注14参照。
- 24 拙稿『伝説と史譚の位相』(注6参照)。
- 25 松本孝三氏「笑話と艶笑譚——南島の位相をめぐる」(『民話の原風景』、注6参照)。
- 26 平成二年八月九日(木)、福田晃、月本一武、西氏採録(於宜保公民館)。著者翻字。
- 27 頭骸骨が甕に入らず、ほかのところにおいてあつたという表現は、久米島のティーラントウルーブシの話などでも聞かれる(仲里の民話)。注13参照)。相当に事実を伝えているらしく聞こえる、宜保チマシーについてのこの後日譚も、すくなくともこの部分については、説話としてのモチーフに則っているものであろう。
- 28 「大和人」。日本人あるいは本土の人。
- 29 歴史書『球陽』外巻・遺老説伝(二七四五年)三の一―二話には、「喜屋武間切東辺名村」の「樽良知」について類似する話を載せている(この人物は現在の糸満の保栄茂タルチーである。注14参照)。畑仕事中の「樽良知」は「樽良知の家」と名のつて怪力を示し挑戦者をだます。近年採録された民間説話のなかで、このタイプのものは多くないようである。
- 30 読谷村の瀬利ブサー御主前(「字座の民話」、注17参照)は挑戦に来た三人組と道中に会い、「弟」と名のつてだます。
- 30 この話型は、本島を二百数十キロメートル南下した宮古島では、高腰按司の闘争を語る壮絶な「史譚」の一部にはめこまれ、本島とは異質な歴史・風土を背景とする、また異なった趣を見せる(『南島昔話叢書』第八卷『宮古島城辺町の昔話』)。

- 下巻へ同朋舎、一九九一年)。
- 31 平成元年八月二日(水)、著者採録(於翁長公民館)。著者翻字。
- 32 あとで述べていることだが、「亀平」が正しい。ここでは、高安盛登さんと、同席の教育委員会の方がおっしゃったとおりの漢字で翻字しておいた。
- 33 注3の拙稿「沖繩・豊見城村の『瓦屋節由来』」参照。
- 34 伝承上の始祖をおなじくする父系血縁の人々。いわゆる「親戚」とは異なる。この場合、高安盛登さんと徳門・高安家は親戚ではないそうである。
- 35 『漂巽紀略』巻之四(川澄哲夫氏編『中浜万次郎集成』、小学館、一九九〇年)。
- 36 「笑古漫筆」五九「中浜万次郎の話」(『真境名安興全集』第三卷、琉球新報社、一九九三年)。
- 37 「笑古漫筆」六八「再び中浜万次郎について」(『真境名安興全集』第三卷)。注36参照。
- 38 具志川市の兼箇段チジュイー(『具志川市史』第三卷「民話編上・伝説」、具志川市教育委員会、一九九七年)の話にあるモチーフ。北中城村のフシ仲村(遠藤庄治氏編『北中城の民話』、北中城村教育委員会、一九九三年)、石川市の根人ブサー(遠藤庄治氏監修『いしかわの民話』下巻・伝説編、石川市教育委員会、一九八五年)の話にも見える。
- 39 平成二年八月九日(木)、黒田孝博氏採録(於与根公民館)。著者翻字。
- 40 遠藤庄治氏監修『宜野座村の民話』昔話編(宜野座村教育委員会、一九八五年)。
- 41 『那覇の民話資料』第四集(那覇市教育委員会、一九八二年)。宜野座村に類話がある(『宜野座村の民話』昔話編、注40参照)。
- 42 『名護の民話』(名護市教育委員会、一九八九年)、『羽地の民話』(同、一九九三年)、『座喜味の民話』(読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九九〇年)、遠藤庄治氏監修『こちんだの民話』(東風平町教育委員会、一九八四年?)。
- 43 『那覇の民話資料』第一集(注11参照)。読谷村の高志保や伊良皆にも類話がある(『高志保の民話』読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八六年)、『伊良皆の民話』(同、一九七九年)。
- 44 『伊良皆の民話』(注43参照)。

- 45 遠藤庄治氏監修 『恩納村の民話』 昔話編 (恩納村教育委員会、一九八二年)。
- 46 『屋我地の民話』 (名護市教育委員会、一九九二年)。
- 47 『瀬名波の民話』 (読谷村教育委員会・歴史民俗資料館、一九八二年)、『儀間の民話』 (同、一九八三年)、『宇座の民話』 (一九八四年)、『渡慶次の民話』 (同、一九八五年)、『波平の民話』 (同、一九八九年)、『楚辺の民話』 (同、一九九二年)。
- 48 『金武町の民話と伝説』 (注16参照)。
- 49 遠藤庄治氏監修 『いしかわの民話』 昔話編 (石川市教育委員会、一九八四年?)。
- 50 『那覇の民話資料』 第五集 (那覇市教育委員会、一九八三年)。
- 51 『こちんだの民話』 (注42参照)。
- 52 第八卷、「笑話」。「一 愚人譚」四一〇「肝試し」。
- 53 稲田浩二氏ら編『日本昔話事典』(弘文堂、一九九四年)の「肝試し」項(藤井尚子氏執筆)。アールネ、トンプソンの *The Types of the Folktale: A Classification and Bibliography* (FF Communications No. 184), 1981, Helsinki.
- 54 常光徹氏『学校の怪談——口承文芸の展開と諸相——』(ミネルヴァ書房、一九九三年)参照。

追記 本稿は、平成八年度、平成九年度、平成九年度、科学研究所補助金(奨励研究A)の援助による成果の一部である。